

<連載>

ザイコロジー

⑥ファイナル

そだちと臨床研究会

川畑 隆

「京都児相マンスリー」からもう1つ

凧と娘

小学校1、2年だったと思うが、私は手作りの凧を持参して大きな広場での凧あげ大会に参加した。でも、いっこうに凧があがらないのである。まわりの凧は風を真っ向から受けて堂々と胸を張っているのに、我が凧は地面に足をつけてまるでだだをこねる幼児のように、私の願いに逆らうばかりであった。「人と違う」ということが、その時、私の身体と心を縮めた。

不器用なのである。不器用だったり、できることが少なかったり、気が小さかったり、そんなことが自分に影響を与えているのはよく知っていた。自分に男の子が生まれたら、ある意味で自分のそこらへんへの挑戦で、我が子のためにも突破してゆかねばと少しでも緊張の糸が張っていたのだが、女の子が生まれて少しだけホッとしたのは正直なところだった。男の子だったら泳ぎもオレが教えてやらんといかんから、スイミングスクールへでも行かなあかんかなあ

とっていて、でも女の子だったから、活発で器用な女房が教えればいいやと、うまい具合に緊張はしぼんでいったのである。

凧を2歳10か月の娘のために作った。…と言っても生協の品物で、紙、竹骨、糸は用意されていて、あとは切って、描いて、貼って、糸を通して、という作業がこちらに任されている。娘が期待して見つめるそのもとの、「おかあさんといっしょ・にこにこぷん」のピッコロを図柄に描き、張り糸で凧の胸を張り終わって、まずは第一段階を突破した。夜中であつた。

翌日、窓から外を見ると、広々とした田んぼで複数の凧が高く舞い上がっている。どうも娘の手を引いて凧を持ってその中に乗り込んでゆく勇気が出ない。やっぱり不安なのである。25年も前の体験が今の自分の足を引っ張っている。

夕方まで待つことにした。アパートの真ん前が田んぼで、そこでの様子は3階建て18世帯の眼下にあからさまになる。年末の里帰りやらで多数の家族は不在だという有利な条件を考慮しても、凧上げの親子たちも家に帰り、見ようとしなければ見えにくい明るさの夕方まで待つことを妨げるものは、自分の図太さのなさへのいらだち以外には見つからなかった。

いよいよ夕方、出陣である。ベランダからは女房が目凝らして見つめている。でも風がないのだ、昼間はたしかにあつたのに。でもまあとにかくあげてみよう。娘に凧を持たせ私が糸を持って走ろうとする。しかし娘が凧を離さない。離すように教えるとうなずくが、またしつかりととられまいと握りしめてしまう。粘り強い説得の末、やっと離してくれて宙に凧が放たれるが、私の背以上に高さは更新されず、すぐに着地。

今度は娘に糸を持って走らせることにした。ヨーイ、スタート。娘はその途端、糸を下に置いて自分だけ走り出す。これは何回やっても修正できなかった。2つのことを同時に行うこと

の幼子にとってのむずかしさを、可愛らしさとともに痛感した。

そんなこんなで二人で走り回ったが、結局、期待した結果は得られず、私と娘はもうほとんど真っ暗な田んぼをあとにした。

それから正月三が日、「風がない。しょうがないなあ」を繰り返し、より馴染みのあるボール蹴りをするために、私と娘はアパートの階段を降りていった。

今、レコードプレイヤーの上で、ピッコロ風と、もしあがらなかった時の代替え風として100 円で買ったビニールカイトが、勇敢に大空に舞いあがる日に備え、休息を静かにとっている。(京都児相・川畑隆の『ほとんどマンスリー』(『京都児相マンスリー』改題) 第7号 昭和63年1月)

子どもの歌

長女が生まれて1曲作り、次女が生まれて1曲作りしました。そして『こもりうた』も作りしました。赤ん坊に聴かせたことはありませんが…。『自由の歌』は、公募に落ちました。

こもりうた

疲れた眼は閉じなさい
疲れた体は横たえなさい
そしてちっちゃな心もそつと
柔らかい布団に包みなさい

今日は嬉しい日でしたか
心が大きく踊りましたか
それともとっても悲しい日でしたか
大粒の涙をこぼしましたか

あなたへの私の囁き

あなたの遠くで聞こえていますか
あなたはいま幸せですか
王子さまはやさしいですか

もう私も眠くなりました
あなたの髪を撫で上げて
そしておでこにキスをして
幸せに眠りましょう

疲れた眼は閉じなさい
疲れた体は横たえなさい
そしてちっちゃな心もそつと
柔らかい布団に包みなさい

小人たちの歌

赤いクレヨン 踊る
幼子の瞳がうっとり夢見ているよ
ホラ 耳をすませば画用紙から
元気な小人たちの歌が聞こえる
踊ろう！ 手をとって
足音かろやかに 今日の喜びを
歌おう！ 手をうって
心の満ちるまで 自由の歌を
僕らの願い 伝えてよ 友だちに
明日もすばらしい朝が来るように

青い折り紙 踊る
幼子の瞳がキラキラと輝いているよ
ホラ 耳をすませばまたあの歌が
にぎやかに小人たちがやってくる
踊ろう！ 手をとって
足音かろやかに 今日の喜びを
歌おう！ 手をうって
心の満ちるまで 自由の歌を
僕らの願い 伝えてよ 友だちに
明日もすばらしい朝が来るように

身障国体の要員

京都府主催の全国心身障害者国民体育大会の要員として、和歌山県担当になりました。和歌山のみなさんと仲良くなってとてもよい思い出ができたのですが、同じ要員の看護師の卵たちとも一緒に過ごしました。その彼女たちのことを書きました。

あなたに逢えて

あなたに逢えてよかった
そんな思いが満ちて
かたむけるグラスの中に
笑顔が揺らいで浮かぶ

あなたに逢えてよかった
他ではないまごころに
別れるときの涙も
岩に優しくしみるように

はじめての人との出会いに
心はずませて
でも見たくはない自分とも
出会ったりして

晴れたり曇ったり
あなたに逢えてよかった

あなたに逢えてよかった
そんな思いは豊かさ
思い出すあの日あの時
面影がそこに揺らいで

あなたに逢えてよかった
あられずりの輝きに
とめどない涙は

すべてかけねない言葉

こわれてしまう危うさと
貫いてゆく強さの中で
今いっぱい開いて
自分を確かめようとして

晴れたり曇ったり
あなたに逢えてよかった

四万十川下り

職場の人たちとゴムボートでの四万十川下りに出かけました。水が苦手な私にとってはまさしく「冒険」でしたが、下り終わって真っ赤に火照った手でもった生ビールのジョッキの輝きを、今でも思い出すことができます。

SHIMANTO

SHIMANTO の川 SHIMANTO の山
SHIMANTO の人 SHIMANTO の夢

静けさに身をゆだねて
大きな愛に抱かれている
艇(ふね)が進む 水を切って
時の流れはゆるやかに

きびしさが目の前に迫る
君も知ってるだろうと
艇が進む 水にたたかれて
時がそのとき止まる

SHIMANTO SHIMANTO すべてを包んで
また静かに流れてゆく

SHIMANTO の風 SHIMANTO の空

SHIMANTO の星 SHIMANTO の愛

おいてきた悲しみも
みんな連れてこいと言っている
大空のきらめきは
心の服を脱がしてしまう

人にやさしくなれるのは
悲しみをくぐってからだと
流れ星が流れて
伝えに来てくれるような

SHIMANTO SHIMANTO すべてを包んで
また明日を迎えてゆく

喫茶店での半日

「いい曲を作りたい」…そんな思いが高まって、半休をとって喫茶店にこもりました。そしてできあがったのが『選択』。苦労して作った分、理屈っぽい感じがするのですが、かけた時間は無駄じゃなかったような気がします。

選択

外は雨が降っている
人通りはそんなに多くない
カップの冷めたコーヒーが
過ぎ去った時を刻む

新しいコーヒーを告げる
私の思いを断ち切るように
ウェイトレスは手荒に
カップをひきあげてゆく

永すぎたのかもしれない
知りすぎたのかもしれない

臆病になったのは
賢さのせいではない

生きることは選ぶこと
生きることは棄てること
護ったのは幻
すべて失くしてしまった

新しいコーヒーが運ばれて
ミルクが静かに沈んでゆく
そのやさしくなじむ様が
今の私に重たすぎる

ドアがふいに開かれて
傘をたたむ二人連れは
水面に投げられた小石のように
今の時を知らせてくれる

幼かったのかもしれない
怖かったのかもしれない
あなたに任せたのは
賢さのせいではない

生きることは選ぶこと
生きることは棄てること
護ったのは幻
すべて失くしてしまった

時は先に進むだけ
雨はやみそうもない

Kさんのこと

ひと回り以上年上のKさんと同じ職場になることはありませんでしたが、府下3児相合同での仕事などではご一緒することがありました。そのKさんが急に亡くなられました。Kさんの同僚のTさんの思いも含めて、胸に迫るものが

ありました。

告別—Kさんに捧ぐ

今朝 あなたが亡くなったこと
聴いたとき 心がただよいました
おさまりつかない心に向かって
実はそうなんだよと
あなたが囁きました

あなたに嫌われてるってこと
それが密かな誇りでもあったのです
不思議に闘争心がかきたてられて
とっても元気が出ました

過激なあなたに過激だねと言われて
優しさ感じ始めてたこの頃
まだ温かいあなたの息遣いを
心がのがすまいとしています

大勢の人が あなたと別れをするために
ここに集っています
それぞれの心の中で
それぞれの別れが
行きつ戻りつしています

弔辞の声が時間を戻して
歴史が過去に凍り付くようです
でも あなたが活かした子どもたちは
確実にいま 心を震わせています

そして 歩みを共にしたTさんの
遠い目とこらえきれない涙に
この全身が吸い寄せられたとき
激しくあなたを偲びました

Kさん あなたに別れを告げます

ファイナルです

高校生の頃から書き始めた歌詞を、6 回にわたってふりかえってきました。そのことで「曲」は舞台に出さずとも「歌」を納める作業を終えた感がある程度得られました。他の方が書かれた歌詞に私が曲を付けた歌はとりあげませんでしたが、それらも含めてやっぱり財産だという感じがします。

さて、欲張って、詞だけでなく曲にも日の目を見させるために、自分の作詞作曲分を YOUTUBE に少しずつ投稿していこうと思います。そのことは前からチラついてはいても気持ちのうえでハードルが高く、この『ザイコロジー』のファイナルを機に頑張ってみることにしました。若い頃のコンサートの音源が残っている曲はそれを使いたいと思います。『ターチャンのオリジナルソング』…10 月頃にはその①を投稿できているかもしれません。よかったら YOUTUBE を覗いてみてください。

『ザイコロジー①～⑥』におつきあいくださって、ありがとうございました。次の号から新しい連載を始めるかどうかは未定です。また私の名前があったら、よろしくお願いします。

2024. 08